

(口絵解説)

花の病害虫(9)——リンドウ——

リンドウの生産状況

リンドウの栽培は昭和10年代から始まり、栽培開始当初は、自生の株を採取し、圃場で栽培する方法が取られた。昭和30年代になって種子からの栽培が始まり、その後面積が急激に増加した。全国的な統計資料にリンドウが取り上げられたのは、昭和54年以降で、昭和55年の栽培面積は367haであったが、平成3年には670haにまで面積が増加している。生産額は平成3年には47億円で、切り花全体の11位となっている(面積及び販売額は、農林水産省果樹花き課調べ)。

リンドウは夏季涼やかな地域での栽培が多く、岩手県、長野県、福島県、山形県、及び栃木県が主な生産県であるが、中国、九州地方(鳥取、岡山、福岡、熊本各県)の高標高地での栽培も多い。

作型は、大きくはパイプハウスを利用した半促成栽培と、露地栽培に分けられ、大部分は露地栽培である。半促成栽培の場合は、6~7月に採花され、露地栽培の場合は、早生から極晩生品種を用いて7~11月まで採花が行なわれる。花色は紫色が多く、ほかにピンク系、白色系がある。またほとんどが切り花栽培で、鉢物は少ない。

品種は、エゾリンドウ(*Gentiana triflora*)、ササリンドウ(*G. scabra*)の選抜・固定種及びこれらの種内、種間一代雑種が主流で、ほかにエゾリンドウの変種エゾオヤマリンドウを交配親としている品種もある。平成4年現在33の登録品種があるが、このほかにも在来種の選抜系統(固定種)も多数栽培されている。特定の品種が全国で栽培されることはほとんどなく、各県独自の品種系統が栽培されるのがほとんどである。

リンドウに発生する病害とその防除

リンドウの病害で最も一般的で、薬剤防除の主対象になるものは、葉枯病と花腐菌核病である。葉枯病は、初め黄褐色の輪郭のぼやけた病斑ができ、後に1cm程の円形または葉脈にさえぎられた褐色病斑を作る。病斑上に黒色小粒の柄子殻が多数形成されるのが特徴で、診断のポイントとなる。有効な薬剤は多いが、潜伏期間が20日前後と長いので、防除が手遅れになる例も多く、発生の初期からの薬剤防除が必要である。花腐菌核病は花器にのみ感染する。初め水浸状の不整形病斑が作られ、病斑部は紫色品種の場合ピンク色になるのが特徴で、病勢が進展すると花腐症状、茎枯症状を呈する。本病は越冬・越夏した菌核上に形成された子実体から子のう胞子が飛

散して感染するため、8月下旬~10月末に発生する。8月上旬までに採花される半促成栽培や早生品種での発生はみられない。チオファネートメチル剤、イミノクタジン酢酸塩剤(及びポリオキシシンの混合剤)が有効である。また、伝染源となる発病茎の除去も重要である。

灰色かび病の花器の病斑は、花腐菌核病と混同されやすいが、灰色かび病では花弁はピンク色にならず淡褐色となり、葯に灰色のかびが密生していることが多い。また、灰色かび病は葉の先端部から発病し、心止り症状になることもある。防除には、TPN剤、ジカルボキシイミド系薬剤が使用される。

褐色根腐病は、初め、根に水浸状の褐色病斑が生じ、やがて拡大し、不整形のややへこんだ赤褐色の病斑となり、腐敗する。このため、地上部の生育が不良になり葉がしおれ、枯死する。発生圃場では大きな被害をもたらす。本病は土壌伝染するため、発生圃場の土壌消毒、田畑輪換が必要である。また、発病苗の本圃持ち込みを防ぐため、育苗床の土壌消毒、苗の薬剤浸漬処理などが行われている。

ウイルスによる病害は、CMV、BBWVによるモザイク病、BYMVによるえそ萎縮病がみられる。モザイク病は葉のモザイク、縮葉、えそ、糸葉状奇形等の症状が知られるが、病原による症状の差は明らかでない。えそ萎縮病は、初めえそ斑点を生じ、その後下位葉からえそを起し、株全体が激しく萎縮枯死する。いずれも行きずりのアブラムシによる媒介が主体と考えられているが、不明な点も多く、対策に苦慮している。

発生は少ないが、褐斑病、茎枯病、炭そ病(仮称)もみられる。褐斑病は、初め灰白色の小斑点、後に5mm前後の円形褐色病斑となる。発生すると壊滅的な被害につながることもある。圃場単位で発生量が大きく異なるのが特徴で、多発圃場では毎年発生する。本病には銅剤、マンネブ剤、TPN剤及びアンバム剤が有効である。茎枯病は、年により散見される。7月以降の高温多湿期に茎が侵され、白色やピンク色のかびを生じる。本病にはチオファネートメチル剤が有効である。炭そ病は、茎の先端部から10cm前後の葉基部が発病し、しおれ、鮭肉色の胞子塊がみられる。本病は葉枯病との同時防除が可能である。

TRVによる斑紋病、MLOによるてんぐ巢病、糸状菌病の白絹病は、近年はほとんど発生をみない。

このほかに、育苗期には、*Rhizoctonia*による立枯れ症状、*Alternaria*によると考えられる斑点症状が認められ、生育遅延や株落ちの原因となっている。

(岩手県園芸試験場 赤坂安盛)